2025 年 10 月 26 日（日）　　宮崎中部教会
九州連合長老会 宗教改革記念講談交換礼拝

「 あなたはわたしのもの 」

イザヤ書 43 章 1 節、ヨハネによる福音書 15 章 16

(1)「主のもの」と「ぶどうの木」

問１　生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答　わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。
この方は御自分の尊い血をもってわたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。
また、天にいますわたしの父の御旨でなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、わたしを守っていてくださいます。実に万事がわたしの救いのために働くのです。
そうしてまた、御自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜びまたそれにふさわしくなるように、整えてもくださるのです。

今から約 500 年前。
いわゆる宗教改革の時代から教会が大切にし続けた告白の言葉を聞きました。

問１　生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

このハイデルベルク信仰問答はこう応えます。

答　わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、
わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。

生涯を貫いて慰めとなるのは、自分が「イエスさまのもの」である、ということです。
細かいことですが「救い主イエス・キリストのもの『となる』ことです」とは言わない。
「『である』ことです」と告白します。これから「イエスさまのものになる」とか。将来的に「イエスさまのものになっていく」とか。そういう話ではないんです。

今、もうすでにイエスさまのものとなっている。
そして、そのたった一つの事実が、生涯を貫いているのです。寝ている時も起きている時も。
道を歩く時も座る時も。病む時も健やかな時も。生きる時も死ぬ時も。どんなときでも。イエスさまのものである。それがこの告白の力強さです。実に 500 年近くの間、キリスト者たちはこれを告白し続けています。

「イエスさまのもの」である。
これは、イエスさまのご自身の言葉で言えば。**イエスさまという「ぶどうの木」に結ばれている**ということです。ハイデルベルク信仰問答問一を告白するときにあまりピンとこない時はぜひ「ぶどうの木」をイメージしていただけたらよいと思います。

「**わたしはまことのぶどうの木、あなたがたはその枝である**」（ヨハネ 15:5）。

イエスさまがそうおっしゃったのは十字架におかかりになる前の夜。
いわゆる最後の晩餐の食事の席でした。この後、弟子たちはみなイエスさまを見捨て逃げます。イエスさまと弟子たちは、離れ離れになる。だからこそでしょうか。イエスさまは一本の「ぶどうの木」に御自分の思いを託されて語られたんだと思います。バラバラになる弟子たちだからこそ。「あなたは、わたしに結ばれている」「あなたはわたしのもの、神さまのものなんだよ」と。弟子たちみんながイエスさまとのつながりを失ったとしか思えなくなる。そんな夜だからです。それでも「イエスさまにつながっている」。それでも「イエスさまのもの」であること。「神さまのもの」であることを信じることができるように。思い起こすことができるように。イエスさまは「**ぶどうの木**」の説教をなさったのだと思います。そして、その思いを強めるように語られたのが、先程わたしたちが聞いた 15 章 16 節です。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。
あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」（16 節）

ぶどうの木の説教の終わりに、イエスさまはこうおっしゃったんです。
「わたしが選んだ。わたしが任命した」って。「わたしがあなたがたをぶどうの木の枝として選び取った。そこで実るように、任命したんだ」って。この「任命」という言葉は、ぶどうの木のイメージから離れているので違和感をおぼえたかもしれません。ただこの「**任命**」という言葉は「**置く**」という含みのある言葉です。物を置くの「置く」です。配置する意味です。

ですから「わたしがぶどうの木の枝として**わたしが置いたのだ**」っておっしゃっている。「あなたがたがこれから向かう場所は、わたしが『配置した場所』『置いた場所』なんだ」っておっしゃる。そして「『ぶどうの木の枝』であるあなたがたはそこで『実を結ぶ』のだ」っておっしゃっている。

（2）イエスさまに結ばれて実る場所に生きているのか？

わたしたちは、これをどう聞くでしょうか。
「イエスさまがわたしを選んでくださっている」。これは、受け入れられるかもしれません。しかし、どうでしょうか。**自分たちが置かれている場所が「イエスさまの愛が実る場所」だと信じているでしょうか。**そうあってほしいと願いながらもしかし現実はなかなかに難しいのではないかと思います。

イエスさまとつながっている喜びということよりも、むしろ。
イエスさまとの結びつきを失うような思いばかりではないでしょうか。行き詰まりがあり、悩みがあり、不安がある。そんなときにもイエスさまと思いたいし、祈っているけど、どうも不安が消え去らない。わたしたちの置かれている場所は、イエスさまとのつながっている愛や喜びが実るというよりも、むしろ。肝心なところで、イエスさまを信じられず、イエスさまを選べず、他のものに頼ろうとする。イエスさまと離れている心地がするとき、ぶどうの木はおろか、イエスさまの「イ」すらでてこなくなってしまうときがある。わたしたちが出かけて行く場所は、いつも、イエスさまからどんどん離れている場所のように思える。**それはまるで、この説教を聞いた後にイエスさまから逃げ出した弟子たちのようではないかと**思います。**でも今日のみ言葉で、イエスさまは「弟子たちが出かけて行くところで実を結ぶように」「わたしが任命した」とおっしゃるんです。「実を結ぶように」に「わたしが任命した」つまり「わたしが置いた」とイエスさまはおっしゃる。**

そして、だからこそ、思います。「イエスさまから離れていった弟子たちはどうなったのか」と。
弟子たちは自分たちの罪ゆえに、不信仰ゆえに、イエスさまへの不信頼ゆえに逃げ出す。永遠の命であるイエスさまを選び取らずに、死にゆく自分たちの命を選び取る。イエスさまを見捨てしまった後悔があったでしょう。自分たちの生きがいを失ってしまったような虚しさ。自分の人生のどん詰まりを感じていたかもしれません。弟子たちは、イエスさまが十字架で死なれて墓に葬られたとき何をしていたのか。恐れて家に閉じこもっていたんです。自分たちもイエスさまのように逮捕されて罰せられるかもしれない。という恐れに捕らわれて怯えていたかもしれません。

でもですね。彼らは、なぜか一箇所に集まっていました。
扉を固く閉ざして一処に集まっていた（ヨハネ 20:19）。宗教改革者カルヴァンはこの箇所を注解するときに、恐れて閉じこもっていた弟子たちが、バラバラにならずに一箇所に集まっていたということにすでに神さまの導き、つまり「摂理」があるとコメントしていました。たしかに弟子たちは散り散りになっていなかったんです。そして、その惨めな弟子たちの「真ん中に」復活のイエスさまは現れてくださいました。そして**「あなたがたに平和があるように」**（ヨハネ 20:19）と言ってくださった。そこでイエスさまが出会ってくださった。
あの恐れに閉ざされていた場所をイエスさまがその復活を祝う喜びの実る場所としてくださったんです。

今日わたしたちが聞いたのは、
「あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように…わたしが任命した」（16 節）
というイエスさまの言葉です。あの場所をイエスさまとのつながりにある喜びに満たしてくださったのは誰か。そうそれはイエスさまなんです。弟子たちが努力してイエスさまを信じ続けた結果、実を結んだという話ではありませんでした。復活のイエスさまこそが、彼らの恐れも不信仰をも、実るところに変えてくださった。罪ゆえに出かけていった場所すらもイエスさまの喜びが実る場所としてくださったんです。**わたしたちの出かけていく場所はイエスさまの命が、イエスさまの安心が、イエスさまの喜びが実る場所。そうされているんです**。

わたしたちがどこに出かけていっても、イエスさまは、そこに実りをもたらしてくださる。
わたしたちが信じて喜びの内に出かけていってそれが尽きない、という話じゃないんです。「もうダメだ」と挫けていく。涙流す所。落ち込む所。望み失う所。だけど、そこにイエスさまが現れてくださるから、共におられるから、そこに喜びが実ってくる。イエスさまがその場所にわたしたちを置いてくださっているんです。

イエスさまが赴かれる場所は、たしかにいつも日の当たらないような場所ばかりでした。
お産まれになった所も、それは飼い葉桶でした。あるいはイエスさまの地上での生涯で出かけられたところ。罪人として疎んじられていた徴税人や娼婦たちのところにいって、食事をして、神さまの愛を伝えられた。あるいは病人たちもたくさんいました。生きていくことを望みをもてない苦しみを抱えておられた人々の所にいらっしゃった。「神さま、神さま」と言って生きているのだけれども、どこかで満たされていないファリサイ派や律法学者のところにも向かわれた。イエスさまが赴かれたところ。それはいつでも「神さまの愛がなく冷えてしまった場所」でした。イエスさまが最後に向かわれたのは、罪人とされ、苦しみを受け、死んでいく十字架でした。さらには、墓の中にまで降られました。
しかし、その愛の冷えた場所に。
イエスさまは、神さまの愛のある喜びや安心、希望を実らせる。そのためにこそ、イエスさまは赴いてくださっていた。そのような場所にこそ、イエスさまは実りをもたらしてくださる御方です。

「あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るように…わたしが任命した」（16 節）

「あなたがたが『ぶどうの木』の枝として実って生きるようにするのは、わたしなのだ」って。イエスさまがそうおっしゃってくださっている。そして弟子たちは、復活のイエスさまと出会って、喜びの内にその歩みを再会したのでした。

（3）万事が喜びの実りとなる教会

イエスさまがどんなときでもその喜びは必ず実らせてくださる。
これが、ハイデルベルク信仰問答問一で確信をもって告白されていることの一つだと言ってもよいと思います。イエスさまのものであることが慰めであると言った後、後半で何が語られるのか。

> **また、天にいますわたしの父の御旨でなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、わたしを守っていてくださいます。実に万事がわたしの救いのために働くのです。**

全ての事が救いのために働くに違いない！と信じて生きることができる。髪の毛一本すらも無駄には落ちない。どんな逆境に置かれても、苦しみに、墓に置かれても。たとえ罪の内に惨めな思いになったとしても、それは「無駄にならない」と告白している。

たしかにそうです。
あの弟子たちが逃げ出したこと、恐れに捕らわれ家に引きこもったことすらも。イエスさまがご自身が罪人とされて惨めに十字架で死んでいかれました。罪なき神の独り子が罪人として死んでいく。その不幸すらも。救いのために用いられたからです。あのイエスさまの十字架な惨めで痛ましい死ですらも、神さまは喜びの出来事に変えてくださる。**そこにも実をもたらしてくださるのが、わたしたちの神さまだからです**。そう考えるならば、一体何が無駄になるのか。わたしたちの行く場所がどれだけ暗く挫折や後悔や失敗に満ちている場所であっても。イエスさまはそこに喜びをもたらしてくださるからです。

そして、イエスさまはそのような「救いのために必要なすべてが与えられる」と今日のみ言葉で約束してくださっています。

「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、
わたしがあなたがたを任命したのである」。（16 節）

これは、父に願うものは何でも与えられるというのは、なんでも思い通りになるということではありません。でも、わたしたちは、救いに必要なことが必ず与えられると信じていいのです。その安心に生きられるように。救いに必要なものは何でも無駄なもの何一つなく神さまが与えてくださる。そう安心して生きられるように、イエスさまは、弟子たちを、わたしたちを「置いた」とおっしゃっているのです。

わたしたちが父なる神さまに祈っていくこと。
それは、イエスさまの救いの喜びがいよいよ実っていくこと。神の国の喜びがいよいよ満ちていくことです。イエスさまの愛が安心が希望が喜びがいよいよ実を結んでいくこと。これを祈ります。しかも、それが必ず実現すると約束してくださっているからこそ、その実現を信じて祈っていきます。そのように、イエスさまがわたしたちを選び、御自分に結びつけ、任命してくださっているのです。

その祈りの内に、イエスさまの救いの喜びが実り続けていく。
それこそが、いまわたしたち教会が置かれている現実です。九州連合長老会の歴史を振り返るとき、その始まりが一人の宣教師だったことを思います。1859 年に長崎にフルベッキ宣教師がやってきた。そして、驚くべきことにそこから 100 年も経ずして九州に 57 の教会・伝道所がたった。最初はフルベッキ宣教師 1 人だった。その小さな 1 人の祈りだったかもしれない。しかしそれが何千人の喜びにまで豊かに実り続けた。何千にもの人々が洗礼を受け、賛美し、聖餐を囲むものとされた。もちろん戦禍で空襲もあった。きっと失敗や挫折もあった。でもイエスさまにつながる喜びは実り続けていったのです。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。
あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」（16 節）

この 1 人からはじまる奇跡を、イエスさまの業としないで一体誰の業といえるでしょうか。イエスさまが任命してくださっているから。イエスさまがわたしたちの罪も挫折も悲しみも死をも、「喜びの実り」にかえてくださるからです。そして、わたしたちもその弟子たち、宣教師たち、先達の歩みに連なっているのです。

この宮崎の地に教会が立ち続けているということ。
これはとても大きなことです。礼拝する群れがある。昔はゼロだったんです。そこに会堂まで立て上がって、礼拝するみなさんがいらっしゃるのですから。ここでこそ、苦しみ悩んで行き先をなくした人々が、復活のイエスさまと喜びの内に出会うことができるのです。

イエスさまは、罪の内にバラバラになっていく弟子たちに語られました。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。
あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、
……わたしがあなたがたを任命した」（16 節）と。

イエスさまが選び取ってくださるのです。
イエスさまに選び取られている。イエスさまの命に結ばれているから。わたしたちは、どこまでも神さまの愛が尽きないと信じることができます。イエスさまは罪人であるみなさんを選んだ。死にゆくみなさんを選び取ったんです。そのみなさんを握りしめる手を、イエスさまは決して離さないんです。わたしたちは罪人であり続けるし、極論ですが、わたしたちが死ぬ時はイエスさまへの告白もその記憶も失ってしまいます。**しかし、それでもイエスさまに結ばれているという事実は消え去らないんです**。イエスさまが選んだからです。みなさんがイエスさまを信じて洗礼に授かったという事実は、その実りはいつまでも残るんです。消え去ることのない実りが残るのです。たとえ死んだとしても消え去ることのない実りが実る。それがハイデルベルク信仰問答の告白している「ただ一つの慰め」だといってもよいと思います。ぶどうの木であるイエスさまに結ばれている。「イエスさまのもの」とされている。その決して消え去ることのないその実りがもっともっといよいよ豊かに実るように仕えていきたいと願います。
祈りましょう。

・祈り

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」

そう宣言してくださるイエスさまの父なる神さま

今日もまたみ言葉に聞くことができ感謝をいたします。嘆く所、落ち込む所、望み失う所をしかし、喜びにかえてくださるイエスさまがおられる。イエスさまがそのような場所に「置いて」くださっていることを聞くことができ、感謝をいたします。わたしたちは罪の内に出かけていく者かもしれません。しかし、あなたが憐れみをもって、そのような場所をもなおイエスさまを喜ぶ場所へとかえてくださいます。そのイエスさまに救われ、イエスさまのとされ、イエスさまにつながっている喜びを大きくしていけますように導いてください。宮崎中部教会が九州連合長老会が、いよいよイエスさまに結ばれている喜びを大きくし、イエスさまの御名をほめたたえ、神の国をもとめて祈り続けることができますように導いてください。感謝をして。イエスさまのお名前によって祈ります。アーメン。

（都城城南教会牧師　岩住啓太）